

仏教から見た科学技術の抱える課題

山本 修一

1 はじめに

現在は、経済的不況だとは言え、日本では科学技術の産物があふれている。大型電気店を訪れてみれば、一目瞭然である。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、掃除機などの家電製品、コンピュータ、携帯電話などが数限りなく陳列されている。村上龍の『希望の国のエクソダス』の「この国には何でもある。……だが、希望だけがない⁽¹⁾」という一文を彷彿とさせる。モノが多くあっても、希望がないというのは、現代の社会を象徴している。モノは科学技術の象徴であり、希望は現代人の心を象

徴しているとすれば、モノとしては豊かであるが、心は貧しいことを意味する。つまり、モノとしての豊かさは築いてきたが、心の豊かさは取り残されてきたわけである。

科学技術の進歩は速い。わずか50～60年の間に多くの科学技術の進歩はなされた。このような速い進歩に人間はついていけるのであろうか。また自然も科学技術によって大きく変わりつつある。自然生態系も自然の改変についていけるのであろうか。様々な疑問が提出されているにもかかわらず、科学技術は依然として同じ道を歩もうとしている。

そこで、本研究では、科学技術は人間や自然に対して一体何をしてきたのか、そして、これからの科学技術は何を考えていったらよいのかを、検討してみたい。

2 人間及び自然にとっての科学技術

はじめに、人間の問題を捉える上で比較の対象として、生物のことを少し考えてみたい。ライオンでも、牛でもよい。彼らは何百年も、何千年も、また恐らく何万年も、形も、またその生活も変わっていないように思える。もちろん、何百万年といった生物の進化は別にしてである。その意味で考えると、生物というのは、本来極めて保守的なもの、変化を嫌うものだと行ってよい。ある意味で、生物らしきとは、変わらないことともいえよう。それは彼らが、生活を変える手段をもたないからである。

それに対して、人間はどうか。確かに人間も、何万年といったスケールで見ると、ほとんど変わらなかったといつてよいだろう。人間の生活は、次第に変化の速度を増して、かつては極めてゆっくりと変化してい

たものが、近年ではその変化が極めて速くなっている。もちろん、その変化の速度は、千年前は、もつと遅く、一万年前はさらに遅いものであったと考えられる。こうして、人間もかつては動物と同じように、その形体も生活もほとんど変わらなかった時代から、生活が急速に変化する時代へと移行してきているわけである。これは、何が変わったのかといえば、裸の人間ではない。生身の人間はほとんど変わらないのに、その環境が変わっているのである。その環境をつくり出しているのが、科学技術の産物ということになる。

しかし科学技術の産物は、いわゆる道具、手段であって、人間そのものではない。この道具や手段が変わることによって、私たちの生活形態が変わってきているのである。そして手段が変わることによって、さまざまなものとの関わり方に変化が訪れようとしているわけである。

2・1 人間にとっての科学技術

人間にとって科学技術とは何か、科学技術の本質は

何か、について考えてみたい。ここではその特徴として、四つあげておきたい。⁽²⁾

①目に見えるモノである

科学技術の産物はモノ、つまり物質でできていることである。自動車、テレビ、コンピュータ、携帯電話、ブルドーザー、エレベーター、化学物質、医薬品、いずれも目に見えるモノである。モノであるからこそ、わかりやすく、しかも力を発揮することができる。しかもこの特徴は、大変強く人間に働きかけてくる。逆に言うと、我々は、目の前にモノを置かれるとそれに魅了され、大変弱いともいえる。モノとしてあるというのは、それだけ大きな魅力をもっている。

②人間が楽をするためのものである

科学技術の産物は、人間が楽をするためのもの、言い換えれば、人間から労働を省くといってもよい。トラクターは田畑を耕すためにつくられたもので、人間が行っていた労働をはるかに減らした。階段を上がるという労働を減らしたのが、エレベーターやエスカレーターである。何千回も繰り返し行うような計算を、

瞬時に、しかも正確に行うコンピュータも頭脳労働を軽減した。これも大変魅力的なものである。そして自動車、船舶、鉄道、航空機の発達により、人間自身や物資を楽に運ぶことができるようになった。田畑を耕したり、重い荷物をもってビルの上にする、あるいは遠いところに物資を輸送することは、いずれも重労働を伴う。こうした労働から解放されたいという誰でもが抱く願望を、科学技術は実現してきたわけである。

この特徴は、私たちの生活に深く関わっている。洗濯や掃除の労働を楽にしたものが洗濯機や掃除機の家電製品である。また、生活に関わる科学技術の中で自動販売機も大きな役割を果たしている。いつでも手軽にほしいものを購入できることを可能にした。自動販売機の役割を一層拡張し、いつでも、どこでもほしいものを得ることができる技術がコンピュータによるネット販売である。かつてのモノの売買という人間活動は、いつも人間を介して行ってきた。しかし自動販売機やネット販売は、人間が張り付いていなくても、モノを売ったり、買ったりできる。これは、時間と空間

の制約を取り除いてきたとも言えよう。

③できるだけ速くことを行うためのもの

できるだけ速くことを行うこと、これも別の言い方をすれば、時間を短縮するとも表現されるものである。歩いていけば、何ヶ月もかかる距離を、電車や飛行機で行けば、数時間で行ってしまう。確かに、物事を速くやってしまうことは決して悪いことではないかもしれない。速く一つのことを終えれば、別のことをする時間ができ、生き方に余裕も出てくることを期待するわけである。速くことをこなすとは、本来余暇を生みだすためのものだったと思われる。しかし現実には、全く反対で、次から次に仕事は増えてしまっている。そしてかえって、仕事は忙しくなり、時間に追われるような生活を強いられるといっても過言ではない。

④人間が思うように動かせるもの

科学技術の産物は、もともとそれぞれの目的をもつてつくられたものだから、その目的を達成するためにある。これは言うまでもないが、科学技術の産物は、そのもっている目的に添って、思うように人間が操作

するためのものである。人間のような生き物は、思うように動かせない。ところが、相手が機械であれば、人間の命令する通りに動くのである。ハンドルを右にすれば、車は右に曲がる。洗濯をしようとすれば、スイッチを入れるだけで、洗濯をはじめてくれる。今日は疲れたから、右に行きたくない、あるいは、洗濯はしたくない、と機械は言わない。これは、動物や人間のように生きている存在は、自らの意志をもって主体的に生きているために、他者の言いなりにならない。しかし機械は自らの意志をもたず、つくられたプログラムに従って動く存在である。また、人間の側でやりたいときにできて、やめたいときにやめることもできるのも特徴である。したがって、生きているものと機械を区別する意味で、人間が思うように動かせるという特徴は、大きな特徴といつてよい。

以上のような特徴をもったものが、人間にとっての科学技術の産物であると考えられる。そして、科学技術は、もともと人間が抱いていた、楽に、速く、そして思うままに動かせる、といった欲望を実現してきたものと

も言える。

2・2 自然にとつての科学技術

一方で、科学技術は自然にとつてどのような存在だろうか。ものいわぬ自然に一体どのような影響を与えているのだろうか。

①自然の資源化

科学技術は自然に存在する物質や生物を資源として見る。もちろんすべての物質や生物が資源として利用できるわけではないことから、まず第一に自然を資源として利用可能かどうかという目で見ようとする。そのため、今自然を管理しようとしている人間は、資源的な価値をもつものは、管理し、大切に扱うが、そうでないものは、まさに価値のない、どうでもよいものとして扱おうとする。こうして人間は、資源的利用価値のある、なし、といった科学技術のフィルターを通して、自然を見ているのである。その結果、自然は、人間を支える存在から、利用されるだけの存在になつてしまったのである。

②生態系の破壊、分断

人間はブルドーザーなどの科学技術の巨大な力を得て、森林を切り開き農地や建造物をつくり、山にトンネルや道路をつくり、河の護岸をコンクリートで固め、あるいは河川に堰をつくり、沿岸を埋め立て、港や飛行場をつくってきた。すなわち、科学技術による森林開発、農地開発、河川開発、海洋開発である。このような人間の活動は、生態系にとつては、生態系の改造、生態系の破壊であり、また生物とその環境の破壊である。

③新しい化合物の合成

人間は自然界では通常起こり得ない化学反応を発見・開発し、自然界には存在しない化学物質、すなわち人工化学物質を作り出している。しかし、人間が科学技術によってつくりだす様々な物質は、自然界にとつて異質なものが多い。たとえば塩素を含む人工有機化合物、プラスチックなどの樹脂、内分泌かく乱物質（環境ホルモン）は自然界に存在しないものである。これらは地球のこれまでの歴史から見たとき、極めて特異的な

物質である。なぜならば、これまでのいかなる地球上の生物も作り出せなかった化合物を作り出しているからである。ゆえに、地球の歴史上で出くわしたことがないため、生物は人工化合物に対する処理方法を身につけていない。また、人工化合物は生物にとって異質であるため、毒物として作用するものが多い。その典型が農薬や環境ホルモンである。こうした人工化学物質が自然界に蓄積することが汚染である。汚染物質は、生態系の食物連鎖を通して、分散また濃縮される。現在の生態系においては、こうした人工化学物質は南極や北極の極域のあらゆる生物に濃縮されていることが知られている。

④物質循環への影響

人間活動は地球の物質循環にも影響を与えている。まず、人間は様々な物質を地球規模で移動させている。たとえば、食料、石油、石炭、天然ガスをはじめ、鉱物、木材など多種多様なものがある。自然界での物質の移動は、大気、河川、海流などの移動媒体を通して行われている。こうした自然界の物質の移動形態に加えて、

人間は自然界の物質の移動量に匹敵するほどの物質を移動させているのである。これは人間活動による物質のフローの増大である。そして、移動した物質のうち、石油、石炭、天然ガス、鉱物などの地下資源は、科学技術によって、作りかえられ、製品として消費される。しかしこうして作られた製品は使用され、やがて、廃棄される運命にある。廃棄されたもののほとんどはその国の中で処理されるゆえ、大気に排出される二酸化炭素などの気体成分を除けば、その国の一部になる。大気に排出されるようなものは、時間をかけて、地球上を循環することになるが、鉱物などはその国に蓄積されることになる。なかでも、都市には物質が集中し、これは物質の都市へのストックの増大をもたらしている。近年では、レアメタルなどの希少な鉱物が携帯電話などハイテク産物に使用され、その多くは都市部に集中的に集められている。まさに都市鉱山として機能しつつある。

一方、化石燃料などは燃焼されることによって、二酸化炭素として地球上を循環することになる。現在懸

念されている地球温暖化につながる。温暖化問題の本質的などころは、地球上にある炭素の循環過程にある。地球上の炭素の循環には、遅いサイクルと早いサイクルがある。早いサイクルは、大気中の二酸化炭素が植物による光合成で有機物として固定され、やがて、生物が死ぬと、その遺骸は微生物の作用で二酸化炭素として大気に戻る。これが早いサイクルである。遅いサイクルの大部分は海洋で起こっている。海洋で生産された有機物の一部は堆積物として蓄積され、何百万〜何千万年といった長い年月をかけて、化石燃料になったり、また火山活動などによって大気に戻る過程である。

人間活動は本来ならばこの遅いサイクルに属する化石燃料を、地下から掘り起こして、燃焼することによって早いサイクルに投入していることになる。この人間活動による負荷が自然界で処理されない部分があり、大気中に二酸化炭素として残存する。これが地球の温暖化を引き起こしていることになる。これは本来であれば遅いサイクルに属する炭素を人間活動によって、

そのサイクルを変更し、早いサイクルに負荷をかけていること、あるいはそのスピードが速いことを意味している。

⑤生物の改変および物質化

生物は本来保守的で、人間の歴史程度のスパンではほとんど変わらないのが普通である。しかし、家畜動物の場合には事情が異なっている。生物の改良、すなわち品種改良である。乳牛のホルスタインや早く成長するプロイラー、豚、牛は、その成果である。牛や豚、あるいは鶏は、生物であるから当然、自然物である。しかし、自然物であるかどうか、怪しくなってきた。確かにこれらの家畜は生理的な部分や形態は、まぎれもない生物であって、その意味では自然物に属する。しかし、その生産されるプロセスからすると、今や人工物といってもよいような状況である。まさに工場で電気製品を作るのと同じような形でこれらの動物は生産されている。人間はこれまで品種改良を繰り返して、それぞれの動物を、肉を生産する目的、乳をとる目的、あるいは卵をとる目的にと

って都合の良い形に改良してきた。すなわち人間の目的に沿ってつくられた動物である。中でも豚はその典型である。⁽³⁾豚は生後6〜8ヶ月で90〜100キログラムになるし、飼料3キログラムから1キログラムの肉ができる。これほど速く成長する家畜は他にないし、飼料効率は他の家畜の中で抽んで良い。つまり、豚は極めて高効率に穀物を肉に変える、いわば肉の製造器である。それは牛にしても鶏にしてもほとんど同様である。これらの動物は肉になるために、また牛乳や卵を採られるために生きていることになる。

一方、これらと本質的に異なる生物の改良が、遺伝子工学による新しい生物の創造である。これは生物の自然な生育や増殖過程で起こらない形式で生物を作り出すことで、その意味で人間が作り出した生物と言ってよい。大腸菌に遺伝子を組み込むことで、ヒトインシュリンをつくる大腸菌にできることがある。遺伝子操作を施した研究用マウスも生産されている。また、遺伝子組み換えによる作物の生産も行われている。この遺伝子組み換え作物は様々なものが作り出されてい

る。例えば、雑草だけを除去するための除草剤耐性作物、作物の病気に強い病害虫耐性作物、収穫量を増大させる貯蔵性増大作物といった第一世代遺伝子組み換え作物もあれば、また特定の栄養価だけを高めた作物、有害物質の生産を抑えた作物、特定の医薬品に利用できる化学物質を多く生産することができる植物といった第二世代遺伝子組み換え作物も作り出されている。

以上のようなことから考えると、科学技術は自然に對して、これまで地球歴史の中で営々と築き上げられてきた仕組み、すなわち物質循環のシステムや生物システムを改造・破壊してきたことになる。ゆえに、自然にとって利益になることはほとんど行っていないことがよく理解できる。

3 関係性を変える科学技術

科学技術は様々な産物を現実世界にもたらし、それらは人間と人間、人間と自然、また自然と自然の間に入り込むことによって、これらの関わりに変化をもたらしている。

①人間と人間の関係

電話などの通信機器の発達により、距離や空間の制約が取り払われ、さらには携帯電話の発達によって、人間と人間の関係は、広がりのない点と点を結ぶ線の関係に変わってきた。さらに携帯電話やコンピュータによるメールによる通信は、声も聞けない関係をつくりだしている。これは単に人間と人間の関係を変えるだけでなく、倫理的にも顔が見える対面倫理から、対面倫理が働かない関係になってきていることを意味している。さらにメールは、対応関係のない一方通行的な関係であることから、さらに倫理的意識が働かないことになる。また、世界中に瞬時に送信することができることから、人間と人間の関わりにおいても、空間的・時間的な制約はなくなりつつある。

自動販売機やネット販売は人間を介することなしに、目的のモノを手にすることを可能にできた。本来モノを売買する人間の関係は、お互いに「感謝」するという倫理的な関係であった。つまり、ほしいものを手に入れることによって、売ってくれる人に感謝し、売っ

た側も買ってもらってお金が入り、感謝する。つまり、お互いにほしいものが手に入ることによって、感謝しあう関係であった。ところが、自動販売機やコンピュータによるネット販売は、人間と人間の間に機械が介入することによって、機械が人間と人間の関係を媒介することになってきたのである。こうなると、人間―機械―人間の関係であって、お互いに感謝する関係はない。このような関係が多くなると、感謝するといった倫理的な行為はやがて廃れてくる可能性がある。

②人間と自然との関係

人間は過去においては自然なくして生きていくことはできなかった。本当は現在もそうである。しかし、人間と自然との関係は大きく変わりがつつある。かつて山村で生業を営むとすれば、まさに自給自活の生活を余儀なくされた。煮炊きをするにも燃やすものは山の木であり、水も山から湧き出てくるものであり、鍋も土からつくった土鍋である。食事の材料も自らつくった米であり、野菜であり、また山で採れる山菜である。あるいは自ら狩猟した猪、兎、鴨や魚貝類である。つ

まり煮炊きをする道具も、材料もすべてそれらは生活者自身が直接自然から得たものであった。まさに生きる糧はすべて自然のものであった。つまり人間は自然に依存して生きるしか方法がなかったのである。しかしながら、科学技術の発達は人間社会の分業化を余儀なくした。高度に専門化した科学技術は、誰にでも扱えるものではないからである。そのため、人間社会と自然との関わりも大きく変化した。つまり分業化によって、ほとんどの人は、自然と直接関わらないでも生きていくことが可能になったのである。過去にあつては、自然に対する倫理性と考えられる禁忌伝承やことわざが残っており、これらが機能していたが、現在では自然と直接向き合う機会もほとんどなく、自然に対する倫理が機能しなくなつてきている。

③自然と自然の関係

生態系は、様々な生物のつながりから成り立っている。しかし「生態系の破壊、分断」の項で述べたように、人間は科学技術の巨大な力によって森林開発、農地開発、河川開発、海洋開発を行ってきた。しかし、これ

は見方を変えたと、科学技術の産物による生態系における様々な生物のつながりの分断でもある。すなわち、自然破壊は自然を分断し、生物の自然との関係、生物間のつながりを断つてしまう。また、農薬の使用は、特定の生物を殺生するための技術であるが、ある生物が特定の地域で絶滅すると、その影響は他の生物に及ぶ。しかしどのような影響があるかは、天敵である生物の絶滅によって被食者であつた生物が突然激増するような現象が知られているものの、その影響はほとんど理解されていない。

4 仏教からみた科学技術

4・1 人間と科学技術の観点から

仏教、あるいは広く東洋の思想では人間あるいは人生をどのように捉えているかを考えたみたい。ここでは人間にとつての科学技術の観点から述べた4つの特徴と対応させて、考えてみたい。⁽²⁾

①目に見えないものが大切

仏教では、目に見えないものこそ大切であると主張

する。人間が生きるうえで大切な心、命、信賴、恩といったものはすべて目に見えないものである。人間の身体と心では、どちらを大切と考えているかといえ、⁽⁵⁾「藏の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」と日蓮も述べているように、身体よりも心の方を重視する。

②人生は樂をしてはいけない

よく「苦勞は買つてでもしろ」という。仏教では、「煩惱即菩提」「生死即涅槃」の原理に基づき、悩みや苦しみがあるからこそ、悟りがあり、幸せがあると説く。老いること、病氣・死があるからこそ、限りある人生を少しでもよく生きようとするのである。その意味で、特に若いころの苦勞は、人生にとって財産であると言うわけである。

③人間が育つには時間がかかる

人間の体が育つのは、少なくとも十数年から二十年程度の時間がかかる。身体だけでなく心が育つには、もっと長い時間が必要になる。例えば、孔子の論語には、「十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして

惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども、矩^{のり}を踰^こえず」とある。少なくともこれは、人間の心が育つ、例えば、独り立ちできるには三十年、不動の自己を確立するには四十年、この程度の時間がかかることを示している。また、仏教では、修行を重んじる。修行は一朝一夕に完結するものではなく、人生全体を修行として位置づける。何年、何十年の修行を通して、身も心もより完成形へと導くのである。したがって、身体だけでなく、心が育つには十分な時間が必要で、じつくりと成熟するのを待つてはじめて、成し遂げられるものであることを示している。

④人間は思う通りに動かないもの、また、思うように動かないのが人生

他者としての人間は、自分が思うように動いてくれるものではない。子供も、親も、たとえ赤ちゃんであっても、いずれも主体的に生きる存在は、自分の思うように動くものではない。長い間飼ひならしてきた犬でさえ、なかなか思うように動いてはくれない。要す

るに、生きているものは、他者に左右されないこと、すなわち主体性をもっていることがその特徴の一つであるからだ。

また、通常人生は思うようにいかないものである。思う通りに生きたい、そのために、私たちはさまざまな苦しみや悩みを解決しようとするわけである。「よからんは不思議わるからんは一定とをもへ」⁽⁶⁾と日蓮も述べているように、人生というものは、思う通りにいくことの方がまれであることを示している。

こうしてみていくと、科学技術が目指しているものと、仏教が目指しているものとは全く反対のものであることが、よくわかる。

4・2 自然と科学技術の観点から

仏教からみた場合、科学技術が自然に対して影響を及ぼしていることはどのように捉える事が出来るであろうか。まず仏教の基本的な自然観を示す。

①人間、動物、植物、微生物のあらゆる生命は、身体と心の働きが仮に和合（五陰仮和合）しているとすると

通の原理によって成り立ち、いずれも仏性という内在的な価値をもつ。その意味であらゆる生命は原理的に平等であり、尊重すべき存在である⁽⁷⁾。

②仏教の「一念三千論」の構成要素である「三世間」は、この世界は3つの階層からなっていると捉える。五陰世間である個体の人間、その集合体の衆生世間である人間社会、それを支える国土世間である自然・生態系の3つの階層である。自然は最下層に位置し、人間や人間社会を支える存在であることから、自然あつての人間や人間社会であるとの認識に立つ⁽⁷⁾。

③あらゆる生命に対する慈悲を基とする。そのため仏教の戒律である「畜殺生具戒」には、「一切の刀杖・弓箭・鉾斧・闘戦の具を畜ふることを得ざれ。及び悪網羅・殺生の器を一切畜ふることを得ざれ」とあるように、殺生に関わる一切の武器や道具を所持することを戒めている。これは殺生だけでなく、破壊などの暴力性をも戒めたものと考えることができる⁽⁸⁾。

④主体と環境は、「依正不二（依報は環境、正報は主体）」として、切り離すことができない関係にあり、またお

互いに相互に影響しあうものと捉える。⁽⁷⁾

⑤ あらゆるものは「縁起」としての関係性の中で存在しているため、関係性なくしてあらゆるものは存在できない。もし、何らかの力や影響が与えられれば、関係性をもつあらゆる世界は影響を受ける。⁽⁷⁾

以上のような仏教の自然に対する見方から、自然に対する科学技術の影響、あるいは関係性の変化を検討してみよう。

まず、自然を資源としてみる見方は、自然を差別することにつながる。これは資源的価値のあるなしといった価値の高低で見ようとするからである。自然を見るこの見方は、人間にとって役に立つか、立たないか、といった人間の基準だけで評価しようとしていることになる。これでは、価値あるものは管理の対象として大切にされ、役に立たないものはやがて切り捨てられ、減びていく運命にある。資源的な価値をもつものは、おそらく自然のほんのわずかな部分で、これではほとんどの自然は生き残らせてもらえないだろう。ゆえに、自然を全体としてその価値を認める見方、あるいはは

べての生命の内在的な価値を認める見方が必要になる。

科学技術の持つ巨大な力は、農地開発、都市開発、沿岸開発を行うことによって自然・生態系を破壊している。また、人工化学物質の多くも生態系の生物にとって毒物であり、存続を危うくする。このような人間活動の在り方は、仏教から見た場合、基本的に否定すべき活動になる。しかしながら、現実的にすべてのこうした活動を否定することはできない。ゆえに、自然の開発に用いられている巨大な力の使い方、開発の在り方を工夫しなければならない。また、農薬のように直接殺生に関わる道具は、できるだけ使用しない方向の技術開発が望まれることになる。

縁起の考え方からみると、関係性を断つことは、そのありように変化が起ること、あるいはそのものの存続を難しくすることを意味している。人間と人間の関わり、人間と自然との関わり、また自然と自然との関わりを科学技術は断ってしまうことがある。これは人間社会においても、また生態系においても同様で、もろく、壊れやすくなることを予感させる。社会にお

ける分業化もそれを促進している。分業化は、人間の専門化を意味することから、人間の能力も一部しか使わなくて済むようになること、人間の関係も特定の関係だけに偏りがちになることである。また自然との関わりも、一部特定の関係だけになってしまう。場合によつては全く自然との関わりをもたないでも、生きていくことが可能になっている。しかしながら、これは自然に対する恩恵といった倫理を育てることを阻んでしまう。ゆえに、自然あつての人間や人間社会であることを認識する場を何らかの形で担保する必要がある。

また、地理的な時間・空間の制約もほとんどなくなり、人間は他者との関わり方や自然との関わり方も変化してきた。地理的に遠い世界の人たちとの関わりは、日常的な人間との関わりと異なり、責任も倫理性もない関わりでしかない。自然との関わりは自分たちの生活と関わりのない観光としての関わりである。つまり、管理する責任のない自然との関わりである。生物の改造も同様で、新しいこれまでの地球の歴史の中で存在しなかった生物を人工的に作り出すことは、生物と生

物との関わりを変えてしまうことも考えられる。

5 まとめ

科学技術はこれまで一体何をしてきたかを総括し、新しい時代を創造していかなければならない時期が来ていると考える。確かに、科学技術が人間や人間社会にもたらした意義は大変大きなものがあつた。そのおかげで私たちの生活は、「便利で、快適で、きれいで、速く」あらゆることをこなしていくことを可能にした。しかしながら、その一方で、本当に私たちは幸福に生きていけるようになったのであろうか、また人間社会を支えている自然との関係はどのように変化してきているのか、といった根本的な問いを突き付けなければならぬ。本来、科学技術は、人間が生きる上の手段であつて、科学技術の進歩は決して目的ではないはずである。しかしながら、「経済を常に発展させなければならぬ」という至上命題が牽引し、科学技術の進歩そのものが目的化している。これでは本来の人間が幸福に生きるための手段と目的が本末転倒している

ことになる。しかも、転倒しているだけでなく、仏教が求めるような大切なことが失われているのが現実である。

ヴァイツゼッカー博士は、現代社会は「消耗性疾患」を患っていると指摘されているが、同様に、科学技術は常に「速く、楽に、思う通りに動く」あるいは「変化し続けなければならない」をテーマに発展し続けなければならないという「強迫性疾患」も患っていることになる。そのため、科学技術の発展の方向性が一つになってしまっている。この疾患を治癒するためには、「速く、楽に、思う通りに動く」あるいは「変化し続けなければならない」とは全く異なる発展の方向性を模索することも必要になる。たとえば、仏教の指向性を考慮したような技術の在り方や発展の仕方もあるであろう。またこれからの科学技術に必要なことは、可能なことと、実際にやることを区別することである。現在では、可能なことは何でもやるという考え方である。それは科学技術の発展する方向性へのビジョンがないからである。ビジョンをつくるためには、人間のこともっとよく

知る必要がある。現在は人間をよく理解しないで、ただやみくもに走っているだけのようと思われる。そこに人間のことをよく知っている仏教の役割があると考ええる。

さらに、現在人間が科学技術を通して行っていることは、壮大な実験であることを認識する必要がある。実験は繰り返してできることが特徴だが、この実験は人間や自然にとっては一回だけのものである。しかもたかだか40〜50年という極めて短期間に行われている。ここで重要なことは、まだ、人間社会にあつては、十分な世代交代さえもなされていないことである。しかも、この実験は人間社会や自然の崩壊への坂道を転がりはじめの実験であるかもしれない。このことはよく認識すべきだと考える。これは極めて危険な実験かもしれないからだ。

文献

- (1) 村上 龍(2002)『希望の国のエクソダス』(文庫文庫)、文藝春秋

- (2) 山本修一(2001) 科学技術に対する仏教の視点、東洋学術研究、40巻1号、81-95ページ
- (3) 大塚 滋(1975) 『食の文化史』(中公新書417)、中央公論新社
- (4) 山本修一・木暮信一(1996) 『自然(生命・環境・倫理)』、創価大学出版会
- (5) 新編『日蓮大聖人御書全集』、1173ページ、「崇峻天皇御書」、創価学会
- (6) 新編『日蓮大聖人御書全集』、1190-191ページ、「聖人御難事」、創価学会
- (7) 山本修一(1997) 環境思想への仏教の寄与、東洋学術研究、36巻2号、57-78ページ
- (8) 山本修一(2001) 大乘仏教における環境倫理…持戒と智慧の意義、東洋学術研究、40巻2号、133-154ページ
- (9) エルンスト・U・フォン・ワイツゼッカー、エイモリー・B・ロビンズ、L・ハンター・ロビンズ(1998) 『フアクター4 豊かさを2倍に、資源消費を半分に』(佐々木建訳)、財団法人／省エネルギーセンター

(やまもと しゅういち／創価大学教授)